

価格は新たなステージ到来か？

目 次

1. 鉄スクラップ価格の推移	
(1) 価格の現状-----	1
(2) 長期時系列でみた現在の位置-----	1
2. 21年急騰の背景	
(1)-①中国の輸入再開-----	2
(1)-②高品位スクラップとH2価格-----	3
(2) 高炉メーカーの購入増-----	3
(3) 鉄鉱石価格の上昇-----	3
3. 新ステージ到来か？-----	4

2022年2月17日（木）

（株）鉄リサイクリング・リサーチ

代表取締役 林 誠一

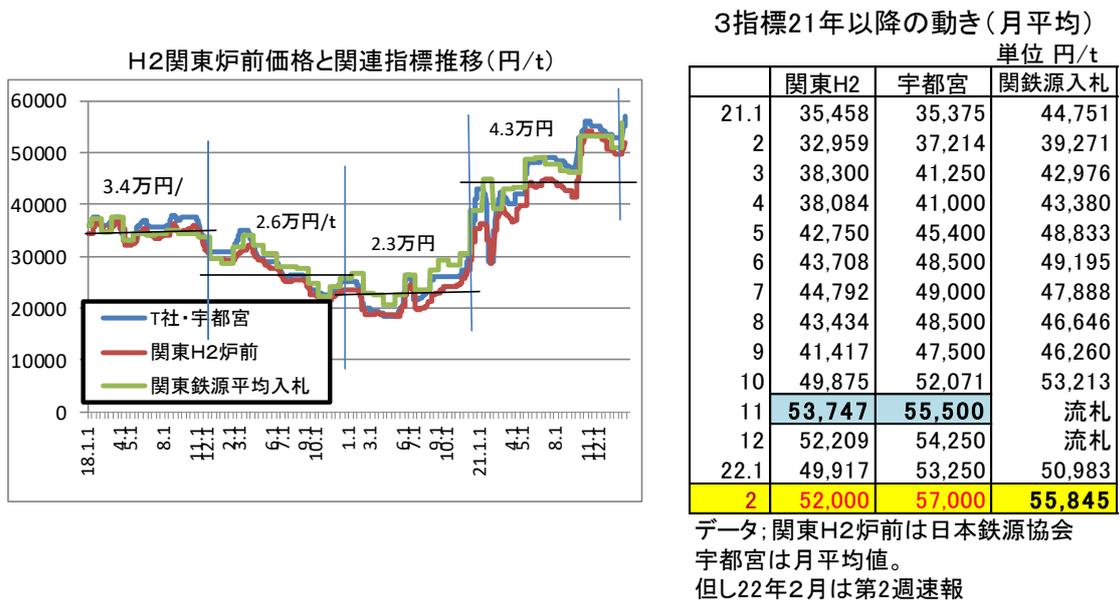
鉄スクラップ価格は、21年秋に6万円/tに近づいたあと、一時4.9万円/t台に下落したものの現状は5万円/t台を強含みで推移している。価格は5万円/t台前半を基軸にした新たなステージ到来の可能性高い。

1. 鉄スクラップ価格の推移

(1) 価格の現状

鉄スクラップ価格（H2 関東炉前；日本鉄源協会）は、19年後半～20年前半コロナ禍の影響を受け、2.2万円/t～1.8万円となる低額となったが、21年初より上昇局面となり、11月には5.4万円/t台の高水準となった。その結果、21年暦年平均は4.3万円/tとなり、前年の2.3万円を2万円/tも上回り、08年の4万4,700円/tに次ぐ史上2位の水準を示した。その後、21年末以降は下降局面となり、一時4万9,000円/t台となったものの、2月は5万円/t台を強含みで推移しており、「山高ければ谷深し」と言われる従来のパターンにあてはまらない商状をみせている。

先行指標の一つとしている2月の関鉄源入札価格は1月の5.1万t/tから約5,000円/t上回る5.6万円/tとなった。外需はベトナムの旧正月明けや中国のオリンピック後の生産回復の動きがある。T社宇都宮購入価格は1月13日の5.3万円/tから2月15日には5.7万円/tに改定した。



(2) 長期時系列でみた現在の位置

調査レポート NO54（19年10月7日）では、過去40年間の推移を3つの局面に分けて分析したが、現状はこのうちの③の延長にはなりそうもない。

反芻すると①は80年2月36,900円/tから2001年7月6,400円/tに至る21年間の長い下降トレンド局面である。90年初のバブル期では4月に21,400円/tまで回復したものの、以降はバブル崩壊後長い経済低迷期が続き98年9月には1万円/tを切って、

2001年7月は6,400円/tまで落ち込んだ。価格は電炉内需主体で変動した時期である。②は輸出に転換後、国際需給に影響されやすくなり、大きな乱高下を体験した期間である。世界的な景気増勢のなか、内外需ともスクラップ需要が増し、使用先の多様化が進んだ。③は2010年以降、19年に至る3年～5年のサイクルを見せた10年間である。この間には、中国のピレット（合金鋼棒鋼＝角鋼）輸出による世界のスクラップ流通と価格への影響問題が起きたが、やがて沈静化し価格は内需主体に変動する動きとなる。そして現状は19年後半～20年前半のコロナ禍低迷から、21年11月の5.4万円/台となる需給を背景とする上昇であり、その後は④の新ステージの到来の可能性がある。

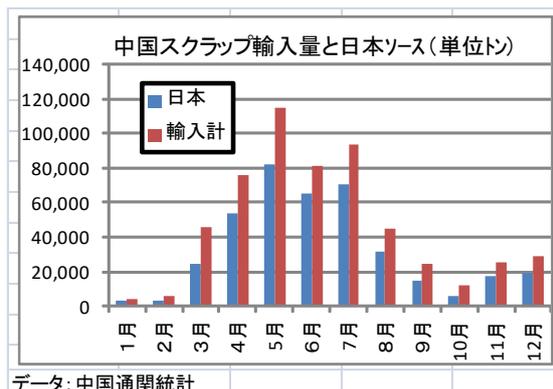


2. 21年急騰の背景

21年急騰の背景に3つ挙げられる。(1)21年1月中国の輸入再開。「再生鋼鉄原料」と制定した5品目のみの輸入を許可した。(2)50年カーボンニュートラルが宣言され、高炉メーカーのスクラップ購入意識が高まった。(3)鉄鉱石価格、原料炭価格等鉄鋼原料価格は中国の増産体制やまず上昇基調をたどった。

(1)－① 中国の輸入再開

輸入再開した鉄スクラップ5品目は高品位スクラップに類する。日本は「新断」及び「HS」を該当させて応じているが、この2品目は特殊鋼電炉メーカーや形鋼電炉メーカーの主原料であり、最近ではCO₂削減対策から高炉メーカーも使用を開始している。一方、発生はコロナ禍の影響を受け低迷気味であり需給はタイトな状況が続いている。このような状況下での中国のニーズ台頭であった。中国系事業者が東京湾

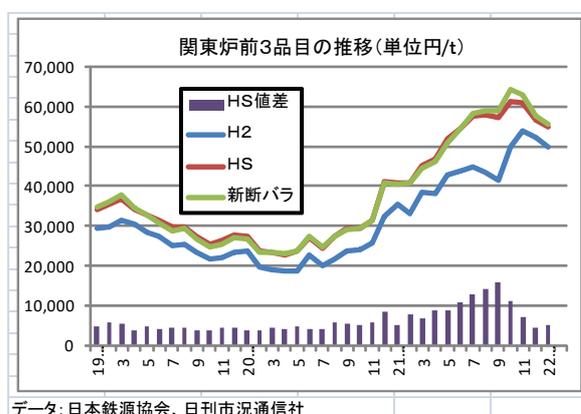


岸沿いに展開して集荷を早め、その結果、高品位スクラップの極端な価格高騰を招き、連動してH2等スクラップ価格全体に波及した。

一方、該当する「高品位スクラップ」は主力ソースの米欧ともに発生が弱く、世界が中国に向けた量は55万t程度に留まった。当初中国が想定した輸入予定量1,000万tは極少な55万tであり、需給を補うまでに至っていないと推察される。中国は日本の価格が高く買えなかったと説明しているが、基を正せば発生が限定される高品位スクラップに絞ったことにあり、自らが高騰を招いたのではないか？

(1) ② 高品位スクラップとH2価格

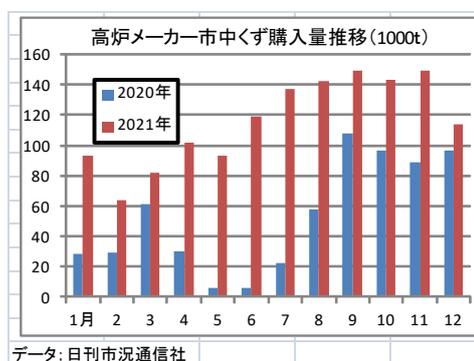
価格推移（関東炉前価格）を分析すると、コロナ前の18年はH2 3.4万円/t、HS 3.8万円/t（H2との値差3,500円/t）、新断バラは3.9万円/t（同4,600円/t）だったが、21年では月別にみると10月にHS 6.1万円、新断 6.4万円/tに上昇し、連動してH2も11月には5.4万円/t台となった。H2との価格差は6月～10月ごろまで1万円/tを超えた。



	関東炉前 3品目の推移			単位 円/t	
	H2	HS	新断バラ	HS値差	新断バラ値差
2012	27,700	29,700	30,100	2,000	2,400
13	33,300	35,600	35,600	2,300	2,300
14	31,200	33,700	33,800	2,500	2,600
15	21,300	23,300	23,500	2,000	2,200
16	19,600	22,100	21,800	2,500	2,200
17	28,800	31,500	31,500	2,700	2,700
18	34,500	38,000	39,100	3,500	4,600
19	26,452	30,900	30,373	4,448	3,921
20	22,520	27,547	27,543	5,027	5,023
21	43,061	52,534	53,171	9,473	10,110

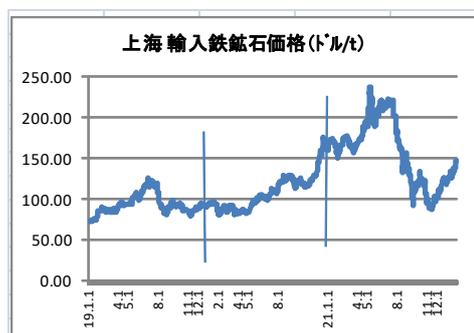
(2) 高炉メーカーの購入増

21年は鉄鉱石価格が高騰し、溶銑コストとの比較でスクラップ購入ポジションとなったことに、カーボンニュートラルを目指したスクラップ多消費化の方向性が追風となったと推察される。21年の高炉市中くず購入量（業界紙調査）は前年の倍を超える140万tとなった。高炉メーカーの購入増加は地域需給をタイトにさせる方向に働いた。



(3) 鉄鉱石価格の上昇

21年初より中国は増産体制が止まず、輸入鉄鉱石価格（上海入着）は上昇を続けた。年初160ドル/tは5月に250ドル/t近くまで上昇。下期に



なって国は環境面から減産体制を指示し、22年1月末は150ドル/tとなっている。こうした主要鉄鋼原料の価格高騰も、スクラップ価格に影響したと推察される。

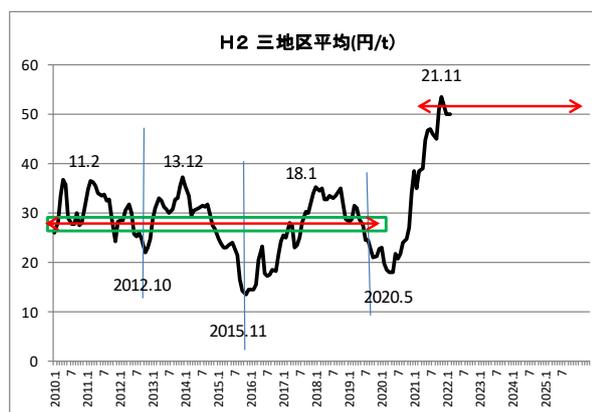
3. 新ステージ到来か？

トピックス N064 4頁を反芻すると、10年～19年間の③局面では3年～4年周期変動が観察され、10年間平均28,000円/tを基軸にして、上下±2,000円/tを帰着ゾーンと考えた。すなわち30,000円/tを超えた時、やがて下降に向かい26,000円/tを切った時、ゾーン内に戻る変動パターンである。そして山谷の波長は民間設備投資の動きに類似していることが判った。この見方を踏まえて今後を考察する。

a. 急騰のきっかけとなった中国輸入再開は、今後、5品目制定を解除して一般スクラップも対象にしない限り増加は見込めないだろう。依然として5品目の発生は弱い。中国としては、22年1月中国国家発展委員会はカーボンニュートラルに向け、スクラップ業の再編と小規模業者の淘汰を目的に資源循環の基盤整備に取り掛かり、金融優遇策などの各種保護政策でリサイクル企業を育成する方針を打ち出した。政策が軌道に乗ってくれば、輸入策は一過性と考える。従って中国輸入が価格に与える要因は主要因でなくなる。

b. 日本の50年カーボンニュートラルの具体的対策であるスクラップ多消費化に向けた動きは、高炉メーカーではまず転炉配合増に取り掛かり、大型電炉新設をめざした鉄源対策が引き続くと考え。また大手電炉では50年1,000万tをめざしたスクラップ確保の動きが始まろう。

c. 鉄鋼原料では鉄鉱石や原料炭は中国の生産動向に関わるが、天然ガスや合金鋼等他の原料価格は高レベルにあり、今後は予断を許さない。bとcが10年～19年とは異なる要素であり、しかも中長期にわたって継続して行くと考え。価格は山谷の波動は同様としながら、5万円/t台前半を基軸にした新たなステージ到来を予測する。また需給面から考察すると4.5万円を下回ることは考えにくい。



データ：日本鉄源協会・月平均

調査レポート N067

価格は新たなステージ到来か？

発行 2022年2月17日(木)

住所 〒300-1622 茨城県北相馬郡利根町布川 253-271

発行者 株式会社リサイクリング・リサーチ 代表取締役 林 誠一

<http://srr.air-nifty.com/home/> e-mail s.r.r@cpost.plala.or.jp